守章__周囲内見

守章(もりあきら)は、1996年から守雅章と守喜章による双子の兄弟ユニットとして活動を開始し、映像、写真、音など様々なメディアを使用した展示で、自己と他者との距離や集団・社会、公共空間に存在する見えない境界を探っている。当館で2000年に開催された「MOTアニュアル低温火傷」展では全裸の双子のアーティストが背中合わせにお互いを支えあうように体重をかけ、最後にはバランスを失って崩れ、映像が暗転することを繰り返すインスタレーションを展示したが、MOTサテライト開催当時は弟の守喜章のみがその名を引き継ぎ活動していた。作家は今回、平野地区にある印刷所の跡地を舞合に、音による新作のインスタレーションを展示した。印刷所は材木店と並び地域の重要産業であり、「木場」の役目を終えた今も紙を扱う工場や会社は多くある。会場となったスペースで印刷所を営んでいた会社は数年前に別の場所に移転しており、残っているのは使われなくなった水道とシンク、蛍光灯だけで、インクの染み付いた床や壁がかつての名残を示していた。作家はそんな空間に視覚的にはほとんど手を加えず、「音」を介入させることにした。そこでは誰もいない空間に人の営みを想起させる音が響いてくる。部屋の中ほどからは紙を断つ裁断機の音が。蛇口付近からはテン、テンと水滴がシンクを打つ音が。壁に立て掛けられた蛍光管に近づけば、キン…キン..とランプが切れかけた時の音が。これらの音は、作家が録音したり集めたものであり、バイブレーションスピーカーを通して来場者の鼓膜に届けられる。バイブレーションスピーカーは硬い素材に取り付けて表面に振動を伝えることにより、その素材そのものをスピーカーに変換するというものだ。直後3-4cmのごく小型のものをシンクの下や扉などに直接取り付けており、パッと見ただけでは気づかれないために来場者はポルターガイスト現象に遭遇したかのような体験をする。この作品において重要なのは空間を指向する意識であり、作家が着目したのは「周囲」というキーワードだ。会場で配布されていた作家本人による作品の考察テキストを以下に掲載する。

周囲と内見についての考察

守章

本作のタイトルは『周用内見』（しゅういないけん）と読みます。不動産屋で部屋探しの際に下見をする手続き(内見）の視点を変えてみる機会、という意味が込められています。部屋の内見をする時と言うのは、その場所に対しては訪問者であり、かってそこにあった生活感からは客観的な立場に居るのかと思います。この会場には、かつての印刷所として運用されていた気配がありながらも、部屋に残された古いカレンダーからは長い時間が経過していたことが窺い知れます。人の営みが失われ、内部に居ながらも、外部にさらされているかのような感覚、つまり内部と外部の気配が鬩ぎあう状態にあると捉えられます。今回の展示では、かってあった部屋の気配とそこを訪れる人々の身体が受け取る感覚、その鬩ぎあう範囲を周囲と名付けました。その際に、この場所の周囲とはどこで何であるかと言うことを探る方法として音を介在させることに決めました。内と外の境と思われる場所から、この場所に関わる音、この場所を彷彿とさせる音が響いてきます。それぞれの音が不定期に混じりながら現れる場所に、観覧する人々がその音に立ち会うことを考え、このタイトルに辿り着きました。周囲と近隣は親戚関係にあるようなもので、周囲にあるものはその場所の住人になることで時間をかけ近隣に変換するものなのかと思います。

このテキストを最初に読んだときに思い起こされたのはS.フロイトのUnheimlichという概念だった。ただし、本作においては「heimlich」（慣れ親しんだもの）が時間を経て「Unheimlich」（不気味なもの）に転化するのと逆の現象が起こりうる。来場者の多くはこのスペースになんの縁もないので、自分のテリトリーの「外」としての印刷所に入り込み、自分ではない他者の気配を感じることになる。しかしテキストで示されているように、(実際はありえないことだが）そこの住人になり時間をかけることで、「過去/他者の気配」と「現在/自身の身体」の鬩ぎ合う範囲＝周囲にあるものは、親しみをもった「近隣」に変化する未来が示唆されている。時間を経た身体感覚の変容の可能性こそが作品の醍醐味と言えるだろう。
周囲といえば、この空間で最も特筆すべき音は、出入口の扉から聞こえてくる音だ。正面の道路を行きかう車の音や通行人の声といったリアルな環境音に混じって、選挙カーの音や鳥の鳴き声といった建物の「周囲」で聞こえてきそうな音が実は「内部」から鳴らされている。これらは実際の音だと思って気づかない人もいたが、「引き戸を開け閉めする音」では、誰かが入ってきたと思って振り返ると誰もいない、という出来事から仕組みに気づく人が多かった。音を介して空間自体をメディア化し、内と外の領域の境界を揺るがす守章らしい作品であるとともに、まちや環境の変化に私たちの身体はどう適応・対応していくのかを考えさせるMOTサテライトならではのプロジェクトとなった。

平成30・31年度　東京都現代美術館年報　研究紀要 第21・22号より
清澄白河の窓からー「MOTサテライト2017 秋むすぶ風景」
小高 日香理